

自家幹細胞療法 ICF 変更対比表

頁	J-ARM version1.0_01Jul2016	J-ARM version2.0_01Aug2017	変更内容
P.3	<p>2.間葉系幹細胞とは</p> <p>動物の体には、さまざまな器官や臓器などに変化する（「分化する」といいます）細胞が存在します。この細胞は幹細胞（かんさいぼう）と呼ばれます。幹細胞療法とは、この細胞を体外で培養し、体内に戻してあげることで、<u>失われた臓器や怪我</u>の再生を行う治療法です。</p> <p>（略）</p>	<p>2.間葉系幹細胞とは</p> <p>動物の体には、さまざまな器官や臓器などに変化する（「分化する」といいます）細胞が存在します。この細胞は幹細胞（かんさいぼう）と呼ばれます。幹細胞療法とは、この細胞を体外で培養し、体内に戻してあげることで、<u>傷ついた器官や臓器</u>の再生を行う治療法です。</p> <p>（略）</p>	(表記変更)
P.5	<p>3. 自家幹細胞療法の方法</p> <p>（略）</p> <p>ごく稀な割合で、細胞の増殖不良、細菌の混入、また地震などの災害時において細胞が使用できなくなった場合、再度採取を<u>お願いする</u>ことがあります。</p> <p>4. 期待される効果について</p> <p>（略）</p> <p>関節炎では、幹細胞は<u>は</u>関節に新たな軟骨や骨膜を形成させ、痛みを和らげたり、炎症を抑制させると考えられています。</p> <p>上記のような疾患において効果が期待される一方で、メリットがまったく得られない疾患やケースもあります。</p> <p>5. 予測される不利益やリスク</p> <p>（略）</p>	<p>3. 自家幹細胞療法の方法</p> <p>（略）</p> <p>ごく稀な割合で、細胞の増殖不良、細菌の混入、また地震などの災害時において細胞が使用できなくなった場合、再度採取を<u>行う</u>ことがあります。</p> <p>4. 期待される効果について</p> <p>（略）</p> <p>関節炎では、幹細胞が<u>は</u>関節に新たな軟骨や骨膜を形成させ、痛みを和らげたり、炎症を抑制させると考えられています。<u>その他にも、猫の口内炎や犬の炎症性腸疾患などの疾患においても有効性の確認が徐々にすすめられています。</u></p> <p>上記のような疾患において効果が期待される一方で、メリットがまったく得られない疾患やケースもあります。</p> <p>5. 予測される不利益やリスク</p> <p>（略）</p>	(表記変更)
			(助詞変更) (追加)

自家幹細胞療法 ICF 変更対比表

頁	J-ARM version1.0_01Jul2016	J-ARM version2.0_01Aug2017	変更内容
P.6	<p>脂肪や骨髄液の採取には、全身麻酔を実施するため麻酔のリスクが存在します。さらに、細胞を培養するのに約 2 週間かかり、その間病気が進行してしまう恐れがあります。細胞培養には、ウシ胎<u>児</u>由来の血清（FBS）を用いるためウシに対してアレルギー反応を呈する動物はアナフィラキシー反応を起こすリスクが高まります。</p> <p>幹細胞からは、新しく血管を作る物質が多く放出されると報告されており、すでに<u>がん</u>が塊として存在していた場合は、この物質の影響により<u>がん</u>が大きくなってしまふ可能性もあります。</p> <p style="text-align: center;">6. 他の治療法との比較</p> <p>患者さんの病気の種類や現在の状態によってさまざまな治療法が考えられます。他の治療法と幹細胞療法とのメリットデメリットを<u>担当</u>獣医師より詳しく説明いたします。</p> <p style="text-align: center;">7. 幹細胞療法を受けるにあたって</p> <p>幹細胞療法を受けるかどうかは、<u>患者さん</u>に決めていただくことであり、強制ではありません。また幹細胞療法を受け<u>られ</u>ない場合でも、そのことにより現在の治療が受けられなくなったり不利益を被ることはありません。さらに、幹細胞療法を受けていただいたあとでも、理由に関係なく中止を希望する場合や継続が難しい場合にはいつでもやめることができますので、<u>担当</u>獣医師にご相談<u>下</u>さい。いずれにおいても、<u>担当</u>獣医師はあなたにとって最適な治療をご相談します。</p>	<p>脂肪や骨髄液の採取には、全身麻酔を実施するため麻酔のリスクが存在します。さらに、細胞を培養するのに約 2 週間かかり、その間<u>に</u>病気が進行してしまう恐れがあります。細胞培養には、ウシ胎<u>子</u>由来の血清（FBS）を用いるためウシに対してアレルギー反応を呈する動物はアナフィラキシー反応を起こすリスクが高まります。<u>また、細胞培養には抗生物質も使用しているため薬物アレルギーを起こす可能性もあります。</u></p> <p>幹細胞からは、新しく血管を作る物質が多く放出されると報告されており、すでに<u>ガン</u>が塊として存在していた場合は、この物質の影響により<u>ガン</u>が大きくなってしまふ可能性もあります。</p> <p style="text-align: center;">6. 他の治療法との比較</p> <p>患者さんの病気の種類や現在の状態によってさまざまな治療法が考えられます。他の治療法と幹細胞療法とのメリットデメリットを獣医師より詳しく説明いたします。</p> <p style="text-align: center;">7. 幹細胞療法を受けるにあたって</p> <p>幹細胞療法を受けるかどうかは、<u>ご自身</u>に決めていただくことであり、強制ではありません。また幹細胞療法を受けない場合でも、そのことにより現在の治療が受けられなくなったり不利益を被ることはありません。さらに、幹細胞療法を受けていただいたあとでも、理由に関係なく中止を希望する場合や継続が難しい場合にはいつでもやめることができますので、獣医師にご相談<u>くだ</u>さい。いずれにおいても、獣医師はあなたにとって最適な治療をご相談します。</p>	<p>(追加)</p> <p>(表記変更)</p> <p>(追加)</p> <p>(表記変更)</p> <p>(表記変更)</p> <p>(削除)</p> <p>(表記変更)</p> <p>(削除)</p> <p>(削除) (表記変更)</p> <p>(削除)</p>

